

親は受験にどうかかわることができるか その2

親として信頼のおける教員との連携はまず一番の重要事項です。塾の教員と比較してみても、持っている情報の密度の濃さと同時代性において、解る教員の情報は最も大切なことです。さらに、ほかの学校における経験や福島県の他の進学校の情報と、全国の高校における進路情報についての共有ができればこの上ないことだと思います。

都会の高等学校では進学指導は原則行われません。進学のための塾での指導や、関係者の個人的つながりからの情報によって形作られると推察します。

地方においては、塾における指導の機会や指導体制について、若干都会における状況に比較すると、各進学校において毎年の卒業生の実績からの積み上げからの指導が重要視されてきました。

それでも、国公立一辺倒や私立大学の現状認識において、客観視できているかは少々疑問のところもあります。

とりあえず、授業料及び受験料や、生活の基盤としてのアパート代等の問題から、理系なら国立、私立文系なら国立とともに東京の早慶上智ICUとMARCHクラスということもあるでしょうが、個別の大学学部によって魅力あるカリキュラムや教授がいる場合も多くあり、一概にいうことはできないところでもあります。

受験勉強は、自分で構築するものですが、その先鞭をつける人の存在が重要です。基本的に教員との出会いが生徒の今を形作ります。昨年など、学校に残って夜遅くまで指導していた者がいた形跡があったことは否めません。

「早く帰りなさい。」という指導をかいくぐって、化学の有機式が黒板に残っていることがままありました。

土曜日や日曜日にもどこからか集まってきては、集団で学習していることもありました。原則土曜日日曜日にも、一度は学校を訪れるのが趣味ですので、遭遇すると「解散しなさい。」といわれるので皆嫌な顔をしていたものでした。

しかし、そんな学習の積み重ねで、大学の門をこじ開けていったことは事実です。簡単ではない道筋を、ともに歩んでくれる教員が、磐城高校にいても事実です。

磐城高校は塾ではありませんが、塾以上の指導を徹底している場合もあります。子どもが受験で苦しむときに、そっと傍に寄り添うことのできる教員もたくさんおります。

他人事にするわけにはいきません。20年後のいわきを支える仕事だと思っています。